

Choose you these artbooks in ietokurashi.



あなたに選んだ アート・ブック

選書 佐藤慶太さん(汽水社)

「くまもとの家と暮らし」読者のために、並木坂の古本屋「汽水社」の佐藤慶太さんが選んでくれた5冊がこちら。とりわけアートや美術にわくわくなくても、部屋のなかで特別な存在になってくれるものを。

「ジャケットのビジュアルにピンときたものって中身も好きな場合が多い。いわゆるレコードの“ジャケ買い”みたいな感じで、アート・ブックも直感で選んでいいと思います。詩集や写真集と似たようなもので、通して読んでも小分けにして読んでも、ページをめくるたびに新しい発見があります」。



『I LOVE FAST CARS』
クレイグ・マクディーン
¥2,310

『VOGUE』などで活躍するイギリスのファッションフォトグラファー・クレイグ・マクディーンによる写真集。モータースポーツ、ドラッグレースに集まる人々を臨場感たっぷりに写した楽しい作品。子どもが描いたラクガキのような、ゆるくてポップなジャケットもかわいい。



『ドラキュラ』
フランシス・ Coppola & 石岡瑛子
¥6,600

「昨年開催された大規模回顧展が話題を呼んだ世界的デザイナー・石岡瑛子。彼女が衣裳デザインを手がけ、アカデミー衣裳デザイン賞も受賞した映画『ドラキュラ』の衣裳に焦点を当てたビジュアルブック。デッサンなんかも載っていて見応えがあります。ファッション好きな方に」。



『TAIZO KURODA』
¥10,780

「静謐な白磁作品で知られる陶芸家・黒田泰蔵(たいぞう)の作品集です。国際的にも評価が高い氏らしく、こちらは海外で出版されたもの。内容もさることながら、作品世界に通じるような静かでモダンな装丁も気に入っています。この本があるだけで場の空気を変えてしまうような魅力を持つ、ザ・アート・ブックな一冊です」。

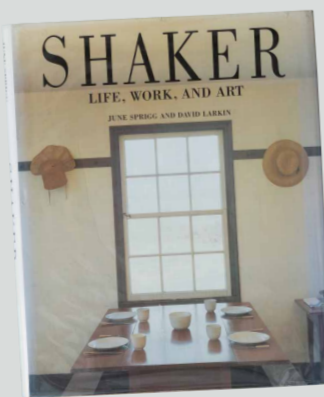
『ウィーン・モダン展図録
クリムト、シーレ世紀末への道』
¥2,750

「2019年夏に国立新美術館で開催された展示会の図録です。全出品作を掲載したハードカバーで、同時代の建築、インテリア、ファッションまで、美があふれたウィーンの世界文化を紐とく貴重な資料。あのクリムトやシーレが生きていた時代をリアルタイムで感じることができる美しい一冊です」。



『SHAKER
LIFE, WORK, AND ART』
¥4,180

「18世紀～19世紀に独自のコミュニティを築いたシェーカー教徒たちの暮らしやものづくりに密着した写真集。彼らはミニマルながら実用的な暮らしを嗜好する人々で、建築、家具、キッチン道具など、シンプルかつ合理的なプロダクトが紹介されています。今の時代も何かヒントになるものが見つかるかも」。



古書 汽水社
Tel.096-288-0315
熊本市中央区城東町5-37
ビュアーズ夢大ビル
営業時間:11時～21時
休み:木曜



「Happy」だけでなく、
それはずしりと響き、
いつまでも残った。

の地に根を張る7組

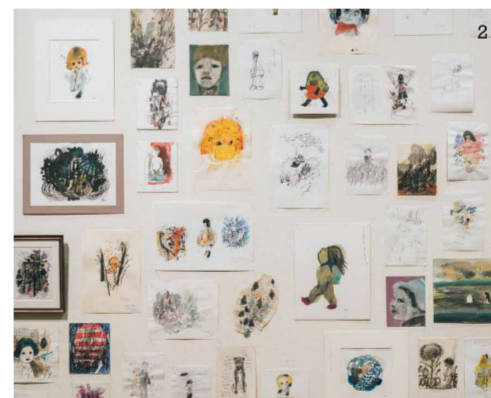
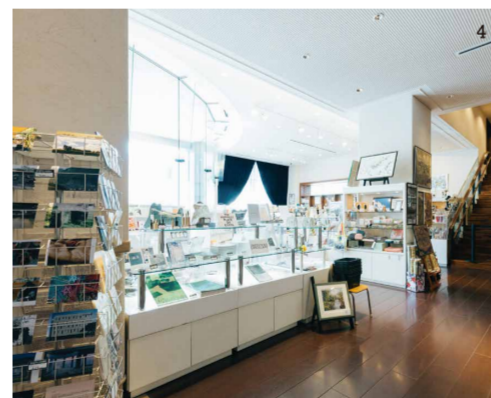
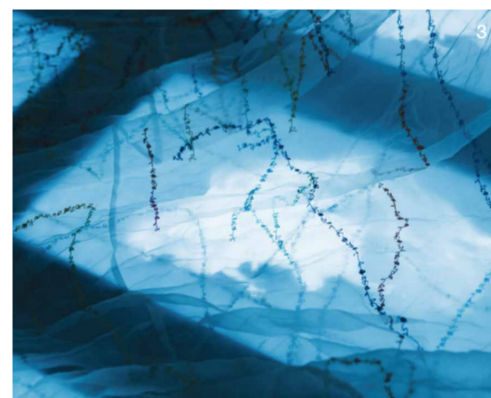
佐々木さん。
アートって
なんですか？



展覧会「段々降りてゆく」の表現者

Let's talk Art.

街のどまんなかで鈍くスパークしていたのは、こころの内側をえぐるようなアートだった。時に「難解」と称されることも多い現代アートだけど、こうして一つひとつの現物を目にすると、同じ時代を生きている表現者たちの、地道な衝動の目撃者となったことを実感する。現在、熊本市現代美術館で開催中(～6月13日)の展覧会「段々降りてゆく」を歩きながら、企画者であり学芸員の佐々木玄太郎さんに、アートについて語ってもらった120分のこと。



熊本市現代美術館

Tel.096-278-7500
熊本市中央区上通町2-3
開館時間:10時～20時
(展覧会入場は19時30分まで)
休館日:火曜日(祝日の場合は開館し、翌平日休館)、
年末年始(12月29日から1月3日)
入館料:無料(企画展示室を除く)
<https://www.camk.jp/>
※最新情報はHPでご確認ください

- 1 大分県竹田市を拠点に活動する加藤亮と児玉順平による美術ユニット「オレクトロニカ」が生み出した巨大人形。
- 2 宮崎県綾町在住の「すうひゃん。」によるもの。子供という存在をとおして、現代を生きる人間の姿を象徴的に描き出そうとしている。
- 3 父親との間に抱える軋轢(あつれき)を起点にした作品を発表し続ける宮本華子は、荒尾市出身。「オレのため」という呪いのような言葉を纏んだウエディングドレスが印象的。
- 4 館内のミュージアムショップでは、企画展にちなんだ美術家のグッズも販売される。

たとえば経済活動は外からのニーズを満たすことを起点に行われるのですが、基本的にはアートや芸術は、ある意味で「必要がないもの」であり、誰からも求められたものでもない「の」に出発したもので、自分の純粋な関心や問題意識、内側から湧き上がる衝動だつたり、経済活動ではたどり着かない場所にとり着いたり、利益ベースでは生まれないものを生み出してしまいうことがアートなのかな、と基本的には思っています。

各地でのリサーチをもとに企画した展覧会「段々降りてゆく」は、九州に根を張る7組の表現者を紹介しています。作家たちが自らの環境と足元を見つめながら、そこにあるものを掘り下げていくことで生まれた主體的な活動を展示。もちろん上がっていくことも大事だけれど、本展では、降りたり、掘り下げたり、足元から捉え直すために地道な模索を続ける作家の視点を大事にしたかった。芸術インフラが整った首都圏のアートシーンの基準に引き上げられることなく、自分た